

令和3年度

事務所だより 第4号

令和3年12月6日
益田教育事務所



『ふるさと教育』特集号！ ～益田管内の取組紹介～

社会教育スタッフ 社会教育主事兼企画幹 澤江 健

平成17年度(2005年度)から始まったふるさと教育も、令和3年度(2021年度)で17年目となりました。この間、島根県では3年ごとに重点項目を決めて取り組んできています。

平成17年度(2005年度)	ふるさと教育開始
平成20年度(2008年度)	公民館など地域との連携強化
平成23年度(2011年度)	学校教育全体で進める体制の構築と量的・質的充実
平成26年度(2014年度)	小中学校9年間の発展性・系統性の重視
平成29年度(2017年度)	就学前から高等学校までの一貫性のある教育
令和2年度(2020年度)	確かな学力、実行力の育成を視野に入れた展開

このような重点項目に対して、これまで、各市町教育委員会、小中学校、公民館、コーディネーター、民間団体、企業、地域住民など、関係者の方々の主体的な関わりのおかげで、子どもにとっても、大人にとっても魅力的な授業、活動が数多く生まれています。

益田管内の特徴としては、「ふるさと教育」を各市町の施策と結び付け、一体的に取り組まれていることです。益田市は「ライフキャリア教育」、津和野町は「0歳からのひとづくり事業(学びの協働推進事業)」、吉賀町は「サクラマスプロジェクト」というように、ふるさと教育が教育委員会の中心施策として明確に位置付けられています。ふるさと教育の定義は、地域の教育資源(ひと・もの・こと)を生かした教育活動ですが、それに加えて「ひとづくり」の要素が盛り込まれていることも特徴の一つだと言えます。

益田教育事務所だより第4号は、益田管内で取り組まれているふるさと教育の様子を、各市町の社会教育スタッフがお伝えをします。キーワードとして出てくる、「WIN-WINの関係」、「縦のつながり・横のつながり」、「社会に開かれた教育課程」、「ふるさとで学ぶ」、「壁打ち相手」は、ふるさと教育を進めていく上で大切な言葉です。確かな学力、実行力の育成を視野に入れた展開をしていくためにはどうすればよいのかを考える上で、そういったキーワードにも目を向けながら、益田管内各市町の取組をご覧ください。(ふるさと教育の詳細につきましては、島根県教委HPをご覧ください。)



島根県教委HP(ふるさと教育)

「まずやってみる」から生まれるネクストアクション

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 田原 俊輔

益田市内での様々な実践をみると、学校の学びを地域の実践に活かし、そこで得た新たな疑問や知見を学校に持ち返り、また地域に飛び出していくという『学びと実践の往還』の中で、子どもたちの「もっとやりたい」が実現される機会は確かに増えています。その一方で、先生方から相談を受ける中では、このような声が聞こえてくることもあります。

- 『学校を地域に開かなければと言うけれど、「地域に開く」とは、どういう状態のことかな？』
- 『地域との連携・協働は、小規模校ならできそうだけど、大規模校では難しいのではないかな？』
- 『WIN-WINの関係と言うけれど、地域にとっての「WIN」とは何だろう？』

この疑問を解くヒントになりそうな取組を紹介します。益田市全体の人口の約3割（14000人）が集中する益田中学校区（吉田地区）では「地域の多様な大人との出会い」を重視し、保幼小中で互いの取組を情報共有しながら、ふるさと教育に取り組んでいます。

今年度の特徴的な取組として、中学校1年の総合的な学習の時間「益田の中のわたし」があります。それぞれの生徒が住んでいる地域の実態を知り、自分たちにできることを考え、行動することを通して、各教科の学びを活かした主体的な学びを創ることをめざしています。

まず、連合自治会長・公民館長から「吉田地区の現状と自治会の役割」を学びました。その後、自分が住んでいる地区の自治会長・役員さんへのヒアリングに出かけ、収集した情報をもとに「自治会活動をより良くするために自分たちに何ができるか」ということを考えました。10月28日現在、中間発表となるポスターセッションを行い、様々なブラッシュアップのアイデアを受け取りながら、地域の大人に向けたプレゼン準備を進めているところです。吉田公民館が地域側のパートナーとなり、49の自治会が益田中学校1年生の活動の受け皿となっています。今後は実際に地域活動を行う予定です。

このような学習に関わっている地域側（公民館や自治会）の「WIN」は何でしょうか。それは、子どもたちとの活動を通して、そこに集う地域の大人（とりわけ保護者世代）を地域活動に繋ぎ、地域全体の大人の動きを活性化していくための一つのきっかけにできることです。また、「教育課程内でどこまで行うのか」「教育課程外では、どの部分を誰が担うのか」を明確にすることで、地域と学校がより良いパートナーとなり、充実感を増しつつ、互いの多忙感も減らすこともできます。

学校だけではなく、地域にとっても「WIN-WIN」の関係を築いていくためには、「なぜ」「何のために」ということを対話しながら丁寧に進めていくことが必要です。

日々の教育活動を積み重ねる中で、「やってみたい」「できたら面白そう」と思うことを声にしてみてください。各地区の公民館、派遣社会教育主事が「つろうて」考え、「つろうて」動いていきます。



地域の教育資源「^{ひきみりょく}匹魅力」を生かす～匹見小・中の取組から～

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 大峠 直也

昨年度、匹見小・中学校では、匹魅力（人^ひと・木^き・水^みず）を生かした総合的な学習の一環で「みんなの想火プロジェクト（PJ）」を行いました。この活動では、竹灯籠づくりを通して、大人→中学生→小学生で作り方を伝え合い、保育園児や高校生も参加しながら様々な“ひと”とのつながりを作りました。【縦のつながり】

また、竹を通して環境学習を行ったり、竹を生かした“もの”づくり（灯籠や竹ごはん等）をしたり、Iターン者や公民館、保護者など様々な地域の大人を巻き込みながら学習を進めました。【横のつながり】

点灯式当日は、コロナ禍で大々的な周知とまではいきませんでした。関わった地域や保護者の方は勿論、オンラインで47都道府県の「想火PJ」のメンバーとつながり、想いを共有するとともに、ふるさと^{ひきみ}の素晴らしさを肌で感じ合う“こと”ができました。

今年度より、匹見小・中は同一校舎となり、また、小学校に社会教育コーディネーターも配置され、縦と横の連携をさらに強め「**地域と共にある学校**」(コミュニティスクール)の実現に向けてより充実した活動が行われています。(右図参照・活動の詳細は匹見小・中ブログ：blog.livedoor.jp/hikimi_j/より)



これらの活動を通して注目すべき点は、学校内の学習活動だけではなく、地域でも学びの場が充実してきた点です。例えば、今年の夏休みに匹見上公民館で行われた「夏休みワクワク体験（寺子屋活動）」では、6回に渡り子ども達が様々な体験活動を行う中で、たくさんの「ひと・もの・こと」に触れ、多くの発見・気づきを得ました。地域での学びの場が充実したことにより、学校の教科学習で学んだこと（個別の知識・技能）を地域の場で活用し、さらにそこで得た学びや疑問を校内での教科学習や生活の中でさらに学んだり実践したり（思考力・判断力・表現力等）することができました。このような体験を経た子どもたちは、自ら土日や長期休業中にも地域の活動に参加していきました(学びに向かう力、人間性等)。

このように「学校の学び」と「地域での学び」を行ったり来たりすることが「学校と地域の学びの往還」であり、私達が目指す「**社会に開かれた教育課程**」を実現した1つの例ではないでしょうか。

地域の魅力を生かし、縦と横のつながりを意識して次世代を育成し、ふるさとへの愛着や誇りを育てることは「ふるさと教育」の目指すべき姿です。さらに、学校の教育課程内での学びを生かして、学校内だけではできなかった活動が、地域との体験活動によりさらに広がっています。私は、子どもの学びを学校と地域で共有することで、**ふるさとを大切に作る心豊かな子ども達**が、学校を含むその地域で育つと確信しています。私自身、そんな関わりができる地域の一員でありたいと思います。

「ふるさと教育」は学びを豊かにする視点

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 佐々木将光

木部小学校（5、6年）では、総合的な学習の時間を中心に、木部地区における「食と学びの子ども広場」【*1】をテーマに昨年度から活動しています。この2年の取組の中から、子どもたちの学びを深めたポイントを紹介します。

【小学生×行政】

- ・健康福祉課、教育委員会の担当者から「食と学びの子ども広場」のねらいや背景（地域課題）に直に触れることで、より具体的、現実的な課題を持つことができ、学習に対する意欲を高めることができた。また、自分たちの学習と社会とのつながりを意識することにもつながった。
- ・担当者が継続的に関わり、子どもたちからの質問に答えたり、アドバイスをしたりすることで、様々な視点から活動を振り返り、新たな探究のサイクルへとつなげることができた。

【小学生×高校生】

- ・津和野高校の課題探究で、「子どもとの関わり」をテーマに活動しているグループと時間を調整し協働した授業を行うことで、多様な考えに触れたり、相手に応じた話し方を意識したりすることができた。
- ・高校生が学び方や考え方のロールモデルとなっていた。



◆担任の先生から、活動を振り返って◆

木部地区の「食と学びの子ども広場」をつくり上げる中で、まず、目的をしっかりとちながら、自分の役割を考え、様々なことに気付き、主体的にすすめていく力が付いたということです。そして最大の学びは、自分達がやりたい、喜ばせたい、笑顔にしたいと思って取り組んだことに対して、もっともっと大きな幸せや喜びが自分達に返ってきたということです。それによって、さらに周りの人への感謝の思い、地域の方への感謝の思いを強くすることができました。「自分たちは多くの方にやっぱり支えられている」という思いを全員がもっていました。様々なひとや地域のこととつながることで、学校だけではできない豊かな学びにすることができたと感じています。

ふるさと教育とは、「地域の教育資源（ひと・もの・こと）を活かした教育活動」と定義されています。今回紹介した木部小学校の取組で考えると「高校生（ひと）」、「役場の人（ひと）」と、役場の人と一緒に解決をめざす「地域課題（こと）」も教育資源となります。ただし、地域課題の解決が目的ではありません。大切なことは、子どもたちにどんな力を身につけさせたいか、そのために地域の教育資源をどのように活かすかということです。「ふるさとを学ぶ」だけでなく、「ふるさとで学ぶ」という視点により、学びを豊かにすることができます。

【*1】健康福祉課と教育委員会が連携し、福祉と教育の観点による食を通じた居場所づくり（津和野版子ども食堂）の取組。長期休業を中心に、町内の様々な場所で開催。

より探究的なふるさと教育をめざして

吉賀町教育委員会 派遣社会教育主事 中村 浩志

吉賀町立六日市中学校では、令和2年度から派遣社会教育主事と連携し、総合的な学習の時間のリデザインに取り組みました。主に3年生の取組を紹介します。

【3年生ふるさと教育（総合的な学習の時間）学習計画】

	学習内容
1学期	○町企画課や六日市・蔵木公民館長の講演を聞き、まちの強みや課題をつかむ。 ○自分が深めたいテーマを設定し、チームを組む。
2学期	○テーマ別にまちの実態を調べ、提言やアイデアの1次プレゼン資料を作成する。 ○町行政担当者へプレゼンする。 ↓以降担当者に <u>壁打ち相手になってもらい、継続的なアドバイス</u> を受ける。 ○文化祭で保護者や地域の方へプレゼンする。【中間発表】 ○寄せられた意見をもとに、さらに提言やアイデアをブラッシュアップする。
3学期	○町長へプレゼンする（予定）。【成果発表会】

特徴的なのは、行政担当者や観光協会などが、伴走者として生徒たちの学びに継続的に関わっている点です。子どもたちがまちの課題解決に向けて専門家と真剣なやり取りをすることができています。

これまでの様子について、ふるさと教育の担当者へインタビューしました。

Q.そもそも、なぜふるさと教育を見直そうと思われたのですか？

- A. 魅力的な地域資源を生かすためには、教師がお膳立てするのではなく、生徒の興味・関心に基づいた探究的な学習過程を組む必要があると感じたからです。また、吉賀高校では総合的な探究の時間（アントレプレナーシップ教育）で生徒が積極的に地域に出かけて学んでいます。そうした高校での学びへの接続も意識しています。
- あわせて、一人一台端末が導入されたことで、調べ学習やプレゼン作成、外部とのやりとりが容易に可能になったことも追い風となりました。

Q.ここまでの生徒の様子はいかがですか？

- A. 生徒たちは本当に楽しそうに自主的に学んでいます。他人任せにする生徒がおらず、毎回頭を付き合わせながら対話し、チームワークよく活動しています。また、伴走者として関わってくださっているまちの皆さんも、ただ褒めるのではなく、良い点も悪い点も含めてアドバイスしてくださいます。学校だけではここまで多分野の方に関わっていただくのは難しかったと思います。コーディネートしてもらい、感謝しています。

しまねの学力育成推進プランの中にも、『地域に関わる学習の充実』がうたわれています。子どもたちが地域課題としっかり向き合える環境を整え、「課題解決のために何かしよう」といった実行力へとつなげていくために、吉賀町ではサクラマスプロジェクトをさらに推進していきたいと考えています。

